



トゥーレの樹は推定樹齢2000年、根周り58m（幹周り45m、根元直径樹幅14.85m）、樹高42m、推定重量636t

世界の巨樹を歩

メキシコ
オアハカ市

世界でいちばん太い 「トゥーレの樹」

あまりにも巨大なものは視野に入り切らない。予想外に大きなものは恐怖感さえも与える。初めてこの巨樹の前に立ったとき、最初に感じたのは驚愕と呆然だった。

メキシコ・オアハカ市のトゥーレの樹は幹周りでは世界最大とギネスブックに登録されている。樹の根元の周囲は58メートル。この大きさで、しかもいまだに生き続けているのだから、その命には頭を下げるほかない。

世界のさまざまな国から人々が訪れる。そして、私と同じように誰もがその大きさに圧倒され、ため息まじりにこの樹を見つめていた。

トゥーレの樹はスギ科の針葉樹で、メキシコラクウシヨウという種である。「トゥーレ」とはこの樹のある町の名前で、地元では「アウエウエ」と呼ばれている。現地語で「水の老人」といい、その意味の通り、とても水を好む樹だ。

推定樹齢2000年以上といわれるトゥーレの樹だが、1830年ごろ、地

上6メートルの幹から、滝のように水があふれ出したという逸話がある。これは樹の下に豊富な地下水が流れ、その水をトゥーレの樹が存分に吸い上げていたことを物語る。「水の老人」という名にふさわしいエピソードだ。

しかし今、トゥーレの町にはこのアウエウエテの樹は9本しかない。しかも、ほとんどはそれほど太くはなく枯れつつある。人口増加によって、急速に水不足に陥ったからである。

このトゥーレの樹だけがこれほど大きく元気に残存しているのは、実はオ

ACCESS

首都メキシコシティからオアハカ市までは空路1時間。バスなら6時間半。オアハカ空港からトゥーレの樹までは自動車です約1時間半。オアハカ市のSanta Maria del Tuleの町の中心に位置する教会の近くにある。



村の起源を示す石碑のところにトゥーレ町の由来である水草「トゥジン」が茂る

アハカ市が樹の下に灌漑設備を整備して、水が絶えないようにしているからだ。そればかりでなく、樹を長生きさせるために12トンもの枝を刈り込み、有機肥料を与え、避雷針を立て、車道を迂回させたりして必死に保護している。

この保護活動を行う団体の一つ「樹の友だち委員会」は、1994年の設立以来、寄付金を募ってきたという。会長であるベラスコ氏から聞いた、このようなトゥーレの樹にまつわる話からは、いかにこの樹を大切にしているかという情熱が伝わってきた。

ベラスコ氏の紹介で私たちはオアハカ市長に許可をもらい、トゥーレの樹

の幹周りを測らせてもらった。その結果は45メートル。囲いの中に入れてもらうのは特別なことだったが、近づくところどころに枝を刈り込んだ跡が確認でき、梢には意外にもたくさん鳥がいることもわかった。あとで聞くと、鳥のフンで樹が傷まないように定期的にきれいにしていてということだった。毎年のように多くの枝を刈り込んでいてもなお、トゥーレの樹は多くの枝をいきいきと広げている。距離をおいて全景を眺めるとこんもりとした森のように見えた。

このように地元の人々がこの樹に手を尽くしているのは、ギネス公認の樹というだけではない。保護している人の話によれば、現在、さまざまな環境汚染に悩まされる、かつて緑と水の都と呼ばれたメキシコシティの轍を踏まないためだ。そのために彼らは周囲に植林をし、この「水の老人」を町全体の環境保護のシンボルとして守り続けているのだ。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

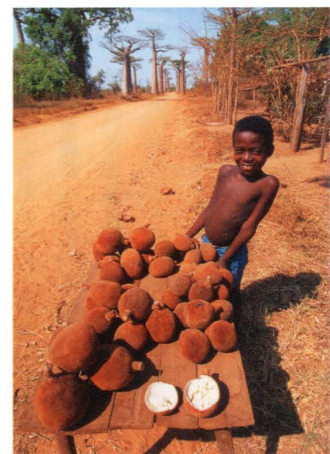
写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹(講談社)』などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。

マダガスカル
ムルンダバ

林立する姿が美しい バオバブ・アベニュー

ACCESS

マダガスカルの首都アンタナリボまでは成田空港から直行便がある。そこから島中央部の西海岸に位置するムルンダバまでは空路約1時間。空港からバオバブ・アベニューまでは自動車ですら約1時間。ドライバー付きの車を予約しておきたい。



バオバブ・アベニューの近くには数軒の民家があり、その子どもがバオバブの実を売っている。実はおやつとして好まれている。

バオバブは、その奇妙な樹形と童話『星の王子さま』に登場することで、多くの人たちに知られている。バオバブはおよそ10種類あり、そのうちの8種類がマダガスカルに生育しているた

め、発祥の地はこの島だと考えられている。日本の1・6倍の面積を持つマダガスカル共和国は、アフリカ大陸の南東、インド洋上に浮かぶ。植物学者たちは

この島を「第7の大陸」と呼んでいる。アフリカ大陸とわずか400キロメートルしか離れていないのに、全植物1万4000種のうち4分の3以上が固有種。横跳びする原種もここで

しか見られない。このように固有種が多いことが「大陸」と呼ばれる理由だ。このマダガスカルで、いちばん大きな生物がバオバブの樹だ。

「神さまが逆さまに植えた木」ともいわれるように、枝が幹の上のほうにしかなく、根のように見える。幹は何か詰まっているように膨らんでいる。この奇妙な形に彼らが生き残るためのメカニズムが潜んでいる。

樹は緑の葉で光合成をして栄養分をつくる。葉がたくさんあれば養分も多くなるとは思うが、同時に葉は根から吸い上げた水分を蒸発させる。つまり、葉が多ければそれだけ水分が必要になる。そのため、乾燥地に育つバオバブは、

自ら下枝を落として葉の数を減らしながら大きくなる。不足する養分は、樹皮の下にある葉緑素で光合成をして、ひそやかに蓄えている。幹が太く膨らんでいるのも、その中に乾期を生き抜くための水分をためているからだ。

この頼もしい樹を、現地では「レニアラ（森のお母さん）」と呼び大切にしている。それはバオバブの葉や果肉が食料となり、種から油を抽出することができ、その樹皮が家を造る材料として人々の生活を支えているからだ。

マダガスカル西部にあるバオバブ・アベニューは人気の観光スポット。ここに立つのは8種類のバオバブの中でもっともスマートなグランディエリという種類。神殿の柱のように気高くそびえる樹々が夕陽に染まる光景は圧巻だ。誰もがただただ見つめている。過酷な自然環境に順応し生き続ける巨木の神秘の風景。耐え抜いてきた厳しさを微塵も漂わすことなく、美しさを見せるバオバブの樹々に人々は魅了されるのだ。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』『地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』『講談社』などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。



推定樹齢1000年クラスのバオバブの巨木が赤土の道の両側に林立するバオバブ・アベニュー。雨期になると周囲にはスイレンの咲く美しい池が現れる。

アメリカ
テキサス州

キャドロー湖に繁茂する 幻想的なヌマスギたち

ACCESS

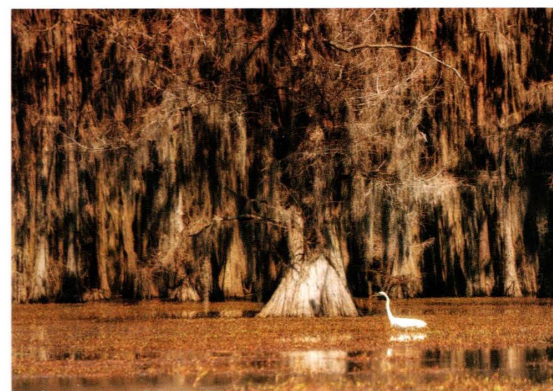
キャドロー湖へはヒューストンの中心街から北北東へ約400km、車で約5時間かかる。ダラスの東側、約320kmの距離にある。詳しくはテキサス観光へ (<http://texaskankou.com/>)。



湖面から真つすぐに立つヌマスギの巨木。枝という枝には着生したスパニッシュモスが長くしだれている。モスという名前はついているが、これはコケではない。いわゆるエアプランツ

の一種だ。風があるときにはゆらゆらと揺れるのだろうが、霧も動かない静かな朝の水面に相対する風景が鏡のように入る。あまりにも幻想的で、それはまるで映画のセットの一場面に入っ

てしまったかのようなふうだった。別世界のような風景が広がるキャドロー湖はアメリカのテキサス州とルイジアナ州にまたがり、総面積108平方キロと日本の猪苗代湖より大きい。



キャドロー湖はカヤックやバスフィッシングが盛んでフクロウやワシ、ワニが生息している。



早朝の風景。スギ科ヌマスギ属の落葉高木で、流れのある湿地帯や川岸を好む。北アメリカ東部からメキシコ湾岸、ミシシッピー川流域に分布する。

テキサス州には多くの人工湖があるが、1812年の大地震でできた唯一の天然湖だ。湖名は19世紀まで周辺に住んでいた先住民キャドロー族に由来する。ここに連れていってくれたのはヒューストン在住16年になる日本人の友人。現地での仕事が終わわり、残りの休日の過ごし方を相談したところ、彼がもっとも好きな場所へ行こうということになったのだ。キャンプサイトに到着した翌朝、散歩に出た直後、出あったのが朝霧の立ちこめる湖に林立するこのヌマスギの森。水上の巨木の森の奥から朝陽の兆しが見えてくると、同時にその方向から一艘のカヤックがゆっくりと流れてくる。ため息の出るよう

な美しい光景に、私は立ち尽くしていた。

キャドロー湖は世界最大のヌマスギの分布地でラムサール条約により国際的に保護されている。訪れたのは3月末だったが、ヌマスギが淡い若緑色の葉をつける新緑の頃や、紅葉の時期にはさらに劇的に景色が変わると聞いた。

実際にカヤックを借りてヌマスギの森を抜けてみた。フィヨルドのように入り組んでいるため、たくさん小さな湖がつながっているように感じられる。そして、その水面に向かって丸く太くなる樹形を見ていると、根元の部分がボール状になって、水に浮かんでいるような錯覚が起きた。その瞬間、20年以上前の雑誌の記事がよみがえった。世界の巨木特集の中にこのヌマスギの写真があり、いつかこの水に浮かんだような巨木を見たいと思っていたのだ。それがここだった。求めていた風景に偶然にも出あえたことが私の感動をさらに大きくしていた。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』『地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹(講談社)』などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。

アメリカ
カリフォルニア州

数千年の樹齢を刻む ブリスルコーン・パイン

ACCESS

ブリスルコーン・パインの森があるインヨ国立森林公園はロサンゼルスから北へ約350km。395号線経由で車で3時間半ほどかかる。冬期はゲートが閉鎖されるので要確認。http://www.fs.usda.gov/inyo/



樹齢数千年の樹が点在するブリスル・コーンパインの森

カリフォルニア州中東部に位置する標高4342メートルのホワイトマウンテン。ブリスルコーン・パインの森はこの山の標高3000メートル付近から上にある。現存する世界最古の樹としてギネスブックに登録されている樹齢4840年以上を数えるブリスルコーン・パイン「メトセラ」のある森

だ。この樹齢は推定ではなく、鉛筆ほどの太さのサンプルを樹の中心部まで採取して年輪を正確に数えたもので、この森にはほかにも4000年を超える樹が17本も生きている。森の入り口までは車で行くことができ、そのため気づかなかったが、森を歩き出した途端、そこがいかに過酷な環境

であるかがわかる。標高が高いため空気は薄く、地面は見渡す限りごつごつとした石だらけで、空からは強烈な紫外線が降り注ぐ。世界最高クラスの乾燥地帯で、年間降水量は300ミリ以下、その大半は雪で積雪は3メートルになるそうだ。昼夜の気温差が激しいうえに、風も強く風速は90メートルを

超えるとレンジャーに聞いた。

そんな厳しい環境に苦悶するかのよう、樹々は樹皮を剥がれ、幹をよじり、立ち枯れたように立っていた。普通の樹とは違う見た目だが、どれも長い間生き抜いてきたすこみがある。

見たこともない風景にしたいに目が慣れてくると、完全に生を終えた樹がまるで生きているかのように力強く立っているのに気づいた。強風に耐え幹を支え、少ない養分をできる限り吸収するために根を縦横無尽に張り巡らせる。そのため生命活動が終わっても1000年以上は樹を支え続ける。さらには、ブリスルコーン・パイン以外の樹が育たない過酷な環境は、倒木を

分解する菌類やバクテリアさえも寄せつけないので、その姿を長くとどめている。生を終えても立ち尽くす樹とは逆に生きている樹が、わずかな緑をつけて、ほとんど枯れたような風情をして立っているのもまた、この地の環境を物語るものだ。成長率は100年で3センチほど。養分が少ないためほんの一部にしか葉が茂らないのである。

だが、成長速度が遅いほど、樹は緻密に育つ。年輪が密なのは屋久杉と同様で、たつぷりと樹脂を含んでいるからだ。そのため腐敗や病気に強く、水分の消失を防いでくれる。あたかもそれは粗食な人間ほど、かくしゃくとして長命なのに似ている。過酷な環境に屈することなく、黙々とそれに準じ、我が身の大部分を枯らして一部だけで生きる。それがブリスルコーン・パインの長寿の秘密だったのである。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』講談社などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。



過酷な環境に屈せず、わずかに葉をつけるブリスルコーン・パイン（右／奥）。その生命を終えてもなお迫力ある姿で立ち続ける（手前／左）

アンコール遺跡を支える ガジュマルの巨木

ACCESS

アンコール遺跡群はカンボジア北西部のシェムリアップ空港から車で町まで約20分、アンコール遺跡まではさらに約20分。タ・プローム寺院はアンコール・ワットの北東2キロに位置する。



多くの観光客が訪れる「アンコール・ワット」は見事に修復され、壁面には美しい彫刻が見られる。

ガジュマルの巨木は、アンコール遺跡「タ・プローム寺院」の回廊の屋根から縦横に根を下ろして立っていた。今にも崩れ落ちそうな石積みみの寺院を飲み込むかのような姿に目を見張った。長い年月をかけて天と地の両方向かって生え広がる姿は、栄華を誇った人間の営みなど歴史の1ページにすぎず、結局はすべて自然に返るのだと語っているかのようだ。

アンコール遺跡群は1861年に発見されるまで、400年余り眠ったままだった。

カンボジアの首都プノンペンから北西へ約300キロにあるアンコール地方は、豊かな水をたたえたトンレサップ湖の西北端に位置する。インドシナ

半島の大部分とマレー半島の一部を領土とした大帝國「クメール王国」が、その首都として9世紀から13世紀にかけて数々の大寺院を築いた。壮大な伽藍と美しい彫刻からクメール建築の傑作といわれ、アンコール・ワットやアンコール・トムなどを含む遺跡群は、世界遺産に登録されている。巨木によってかろうじて支えられているタ・プローム寺院もその1つだ。

タ・プローム寺院は1186年にジャヤーヴァルマン7世が亡き母を弔うために造営し、東西1キロ、南北600メートルにわたる敷地内には三重の回廊が巡る。母の墓があったと思われる中央神殿の壁にはかつて宝石がちりばめられ、寺院には5000人の

僧侶が暮らしていたと伝えられている。

遺跡となった寺院にはきらびやかだった面影はなく、内部はしんと静まり返っている。建物の外から観光客と物売りの子どもの声が時折聞こえてくるだけだ。寺院の回廊から血管のように建物に絡みついているのは、空中に伸びていく気根である。ガジュマルはクワ科イチジク属の仲間であり、その木の枝などの高い場所で芽生え、そこから気根を伸ばして根付き、やがて寄生した親木をのみ込んで成長する。王国が減んだあと、回廊の屋根に種が落ちて巨大化したのだらう。なかには樹齢300年の巨木もあった。ほかのアンコール遺跡群にもガジュ

マルの木は芽生えたことがあるはずだ。しかし、修復によって取り除かれ、その姿は見えない。タ・プローム寺院だけにこの巨木が育っているのは、あえて修復をしないとされているからでもある。それは自然の力を明らかにするためだという。人の手を加えなければ自然はこれほど力強い。私にもそのメッセージは確かに伝わってきた。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』『地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』(講談社)などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。



自然の力がいかに強いかが思い知らされるタ・プローム寺院の回廊。西洋人は修復が進む遺跡を好むが、日本人にはこちらの遺跡のほうが人気である。

真っ赤な樹液を流す テネリフェ島の龍血樹

ACCESS

テネリフェ島へはマドリッドから空路約3時間。龍血樹があるイコー・デ・ロス・ピノスは州都サンタ・クルス・デ・テネリフェからTF-5号線で西へ約60キロ。車で約1時間半かかる。



龍血樹の内部。樹を保護するための装置が設置されている。

7つの島々からなるスペイン領のカナリア諸島は、イベリア半島から南西へ約1000キロ離れた北大西洋上に浮かぶ。アフリカ大陸からは最短距離で115キロと、むしろアフリカに近い。1年を通じて温暖な気候から「常春の島」または「大西洋のハワイ」とも呼ばれるヨーロッパ有数のリゾート地である。このカナリア諸島の中で一番大きな島がテネリフェ島で、面積は約2036平方キロ。そこにスペイン一高いテイデ山（標高3718メートル）がそびえる。動植物はここでしか見られない固有種が多く、その代表が樹齢1000年といわれる龍血樹だ。特別に許可をもらい、幹周りを測ったところ、16・34メートルあった。

龍血樹はひと昔前に流行した観葉植物の「幸福の木」と同じリュウゼツラン科ドラセナ属。同じ龍血樹でもインド洋のソコトラ島（イエメン）にある樹とは種が異なる。その名の通り、樹皮を傷つけると血のように赤い樹液を出す。樹液は古代ローマ時代から止血剤や染料、魔術の素材として重用されてきた。おそらくは15世紀末のスペイン侵略時に、まだ洞窟で石器時代のような暮らしをしていたという先住民グアンチエ族も利用していたことだろう。

思議な樹形に惹かれたからだった。上部に密集した枝は天に向かって反り上がり、枝は2本ずつ短く分かれ筋肉質の男性の腕のように膨れ、その頭頂部に密集する葉は剣のように細く尖っている。この世界一大きな龍血樹を管理する植物園の職員に聞いたところ、この樹は成長は遅いが、乾燥に強く、寿命は長いという。気根を伸ばしながら外側に成長し、内側の気根は枯れていくので樹は空洞になっている。その内部にコンピュータが置かれ24時間温度と湿度を管理し、菌類などの繁殖を防ぐために、乾燥させる装置も設置されている。外側の新しい気根の周囲は成長を促すために土で覆っている。こうした

努力で樹は大切に守られているのだ。原始的に見える龍血樹だが、実は現代の最新技術で守られているというわけだ。年輪はないので正確な樹齢はわからないものの、この先も長く世界一であり続けるだろう。内部を見たあと再び離れて眺めてみると、時代の流れとともに生き永らえてきた堂々とした姿に圧倒された。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』『地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹（講談社）』などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。

誰かが剪定したかのようにバランスのとれた樹形が見事。マドリッド発の飛行機からも見える。



レバノン
ブシャレ村

古代文明を支えた 「神の杉の森」のレバノンスギ



ACCESS
「神の杉の森」(the Forest of the Cedars of God, Horsh Arz el-Rab)に最も近いブシャレ村へは、ベイルートから北東へ120キロほど。地中海沿いの街ビブロスを經由して車で4~5時間かかる。



1843年にマロン派の人々が森の中に建てた石造りの教会。飾られた額などもレバノンスギで作られている。

古代史に詳しい人なら、レバノンスギという名に聞き覚えがあるかも知れない。メソポタミアからエジプト、ローマ帝国、オスマントルコと、次々に登場する文明の発展と衰退の歴史の中でレバノンスギは多様に利用され続けてきたからだ。

中でもよく知られているのがエジプトのピラミッドとソロモン王のエルサレム神殿の造営だろう。樹高が高いうえに真つすぐで堅く、腐敗しにくいという優れた特質のために古代から材として伐り続けられてきたのだ。

レバノンの中央部には南北に走るレバノン山脈がある。この山脈の標高2000メートルまでの地域にレバノンスギの森が広がっていたという。だ

が、今残された森はレバノンの最高峰サウダ山(標高3087メートル)の南西麓に直径300メートル、面積にして7ヘクタールほどに過ぎない。ハゲ山と化したスキー場に囲まれたあまりにも小さな保護区だ。ここが1998年に、「カディーシャ渓谷」とともに世界遺産に登録された「神の杉の森」である。

この森を「神の杉の森」と名づけたのはキリスト教マロン派の人々だった。弟子たちを連れて高い山に登ったイエスが神に姿を変え、大切な木を植えた聖なる地だと言ひ伝えられていたからだ。彼らは7世紀ごろ、イスラム教徒の多いシリアから迫害を逃れてこの近くのカディーシャ渓谷に移り住み、放

牧されている羊から森を守るために周囲に石垣を築いた。

森の中にある小さな石造りの教会の中には、「神に従う人はナツメヤシのように茂り、レバノンスギのようにそびえる」と旧約聖書の言葉が掲げられている。

教会を出ると、青空の下まっすぐ伸びた幹にしなやかに枝を広げたレバノンスギが立っていた。芳しいレバノンスギの香りが漂い、芽生えたばかりの小さな芽もあちらこちらに見える。樹齢数千年、直径2メートル以上の木が30本ほどあり、森の中心には、一説によると樹齢6500年ともいわれる巨樹が堂々と立っていた。大地から決して動かないと誓つかのように力強く根

を張った樹は、かつて広がっていた太古の森を忘れてはならない、と語っているかのように見えた。

今、この森のレバノンスギは日本の協力によって樹勢をつないでいる。そして、村人たちが苗木をつくり植林活動も進めているという。人間によって伐採され続けた森は、人間によって再生されつつある。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』(講談社)などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。

「神の杉の森」のレバノンスギで最も古く、大きな樹。この樹が残ったのは丸太として使いにくかったからだと推測される。幹周り16m、樹高35m。



推定樹齢1000年、幹周り9.5m、樹高12m。エドヒガンの枝垂れ種で日本最大のベニシダレザクラ。東西に22m、南北に18mに咲き広がる。

世界の巨樹を巡る

福島県
三春町

千年の時を超えて 美しく咲き誇る 「三春滝桜」

ACCESS

JR 磐越東線の「三春駅」下車。臨時バス滝桜号に乗車。車の場合は磐越道「船引三春IC」または「郡山東IC」下車後、約20～30分。無料駐車場あり。



周辺の桜情報

三春滝桜の見頃は例年4月中旬～下旬ごろ。三春町内では町名が示すように、梅、桃、桜の3種の花が遅い春を謳歌するように一斉に咲き、甘い香りが漂う。また、三春町内には滝桜の子孫であるベニシダレザクラが2000本あるともいわれている。とくに、福聚寺の桜（御免町）、常楽院の桜（四軒丁）、やそうち公園のかもん桜（桜ヶ丘）、田村大元神社の桜（山中）、明徳門の桜（大町）、王子神社の桜（大町）、浪岡邸の桜（南町）、桜谷のしだれ桜（桜谷）はライトアップもあり、古くから桜の多い一帯だったことをしのばせる。また、水田の映り込みが印象的な小沢の桜（田村市船引町）や滝桜の娘ともいわれる紅枝垂地藏ザクラ（郡山市中田町）、葉の花との競演が趣ある合戦場のしだれ桜（二本松市東新殿）なども少し足を延ばして、ぜひ見ておきたい。

桜前線のニュースが届く頃になると心が躍る。桜の開花と暖かい春の訪れを心待ちにしている日本人ならおそろしく誰もがそんな気持ちになる。

語で、「くら」は神が鎮座する磐座を意味するともいわれる。稲作民族である日本人は桜の花の咲き具合でその年の作柄を占ってきた。桜は神宿る木として特別な存在であったに違いない。奈良の吉野山は飛鳥時代から桜の名所であり、持統天皇が花見に訪れたことで知られている。平安時代には嵯峨

天皇が南殿に植えて宴を催し、豊臣秀吉は700本を植樹した醍醐寺に1300人を招き、贅を尽くした「醍醐の花見」を行った。江戸時代には三代将軍徳川家光が、上野寛永寺に吉野の桜を移植し、隅田川河畔にも桜を植えていった。

葉に先んじて花だけが満開になる桜は栄華の象徴ともされ、一斉に咲いて一週間ほどで儂く散ってしまう姿は日本人の精神性にも合うものだったのだろう。今も桜の時期には、多くの人が花見を楽しむ。

その中でも広く知られている樹が、日本三大桜のひとつ「三春滝桜」だ。福島県が誇るベニシダレザクラである。樹齢1000年ともいわれ、1922（大正11）年に国の天然記念物に指定されている。寿命50年といわれるソメイヨシノより原種に近いエドヒガンの一種だ。

老木でありながら巨体を保ち、毎年、多くの花を咲かせる。もともと長寿だが、その背景には長年にわたる周囲の

人々の尽力がある。

滝桜を愛した三春藩主は御用木として保護したが、それ以前から「滝桜が見事に咲けば、その年は豊作である」と地元の人々にあがめられ、添え木などをして大切に扱われてきた。以来、傷や菌に弱い桜は、大雪で枝が折れれば、樹木医が外科的に枝を切り、切り口に殺菌剤と防水剤を塗布して治療をするなど、慎重な保護活動が行われてきた。それもみな、滝桜の美しさゆえだ。満開の花をつけて枝垂れた枝はまさに滝のようであるが、この枝々が風に舞う様は優雅でありながら祈りの世界にも通じるものを感じさせる。

今や毎年30万人もの観光客が訪れるのは、揺れる桜色の花々が私たちを酔わせ、夢見心地にしてくれるからだろう。そして、毎年、必ず多くの花をつけ、「老いてもますます盛んに生きよ」と無言で語りかけてくれるのだ。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

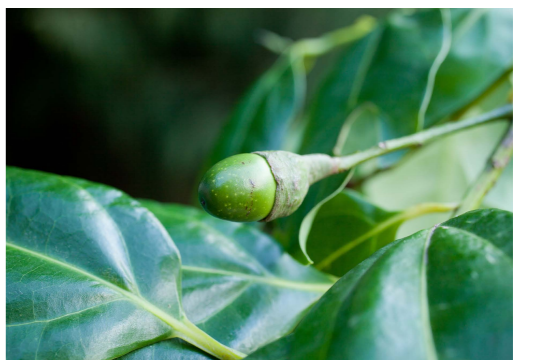
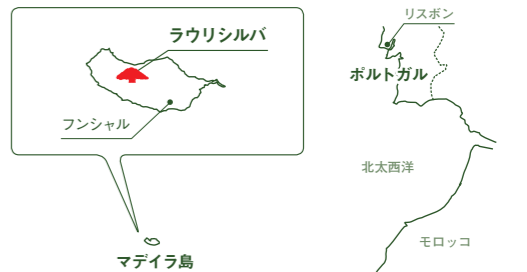
写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で「巨樹を見に行く」「地球遺産 最後の巨樹」「日本遺産 神宿る巨樹」講談社などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主催し、国内、海外ツアーを行っている。

ポルトガル
マデイラ島

月桂樹の巨木を 守るのは 太古の姿をとどめる 照葉樹林

ACCESS

リスボンからマデイラ空港までは空路1時間半。空港からこの木がある中西部の山岳地帯までは車で1時間ほど。



月桂樹の実。同じクスノキ科のリトルアボカドに似ている。

ポルトガル領のマデイラ島は、ポルトガル語で「木」という意味を持つ。1419年に発見されたとき、この島が深い森林に覆われていたことからこう名づけられた。青い海と輝く太陽、一年中色鮮やかな花々が咲き乱れるマデイラ島は、別名「大西洋の真珠」「春の島」とも呼ばれるリゾート地だ。

日本の奄美大島ほどの面積に標高1861メートルのルイボ山を擁する、とても平地の少ない島だ。急峻な地形で亜熱帯から温帯までの気候があり、標高1200メートルあたりからレインフォレストのような森がある点は屋久島にも似ている。亜熱帯気候は海岸線からバナナ畑が

広がる標高400メートルあたりまでで、そこから上は温帯気候となる。リゾート地が広がる海岸線から、車で一気に標高1200メートルルまで登っていくと、深い霧に包まれた丘陵地が広がっていた。目を凝らしながら歩いていくと、緑の葉をつけた照葉樹が多く育っているのがわかる。湿気の

多い場所なのだろう、樹々は皆、幹に苔を纏い、さまざまな着生植物を身につけていた。幻想的な風景が広がるこの森は、1999年には世界遺産に登録された貴重な照葉樹林だ。

島が発見された当時の様子を残す丘陵は「ラウリシルバ」と呼ばれている。日本語ではよく月桂樹林と訳されるが、実際は月桂樹が優占しているわけではなく、数種の月桂樹のほか、同じクスノキ科でアボカドの近縁種などが比較的多い。

標高1400メートル付近には巨木が群生しており、その中で見つけたのが氷河期の第三紀(約6500万〜200万年前)から種が残る月桂樹(学名は *Ocotea foetens*)。幹周りおよ

そ8.2メートルという、大きな枝振りを持つ古木だ。この森が世界遺産に登録されたのは、ヨーロッパでは氷河期に消えてしまった照葉樹原生林が姿をとどめているから。その規模も1万5000ヘクタールと世界最大級だ。まだまだ未知の巨樹もあるという。大西洋周縁でこのような照葉樹林が現存する場所はない。それは、この島が、ポルトガルとはいえ首都リスボンからは約1000キロも離れた大西洋上に浮かび、むしろアフリカ大陸に近く位置しているからかもしれない。

マデイラ島だけで1冊の図鑑ができると言われるほど固有の植物が豊富なのは、この原生林に500種以上の無脊椎動物やシダ植物など、数多くの動物植物が生息しているからだ。それは、この森が今もなお太古の姿のまま残り続け、その植生を守り続けているからだろう。

写真・吉田 繁 文・蟹江節子

写真家の吉田 繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』『地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』講談社などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主催し、国内、海外ツアーを行っている。



幹周りおよそ8.2m。英名で Stink Laurel という。「臭い月桂樹」という意味だが、実際には香りはない。

アメリカ
カリフォルニア州

恐竜の時代から 生き続ける高木 「レッドウッド」

世界でも、最も高い木々が繁茂しているのはカリフォルニア州北部の太平洋沿岸である。南北に55キロ、面積も登録されたレッドウッド国立州立公園だ。サンフランシスコからハイウェイ101号線を5時間あまり北上して森へと近づいていくと、やがて道路周

辺は樹高80メートルを優に超える高木、レッドウッドの幹に囲まれ、まるで巨人の国へと迷い込んだ気分になる。公園内にはいくつものレッドウッドの森があり、気軽に歩けるようにトレイルが整備されている。その中には樹高100メートルを超える「ロスト・モナーク」「リバー・ツリー」「アトラ

ス」「ハイペリオン」「ガイア」など名前が付けられた20本以上の有名な巨木がある。レッドウッドがこの地を好んだのは雨と霧が多く、温暖な気候のためだが、その日も森には薄く霧がかかっていた。潤んだレインフォレストにはレッドウッドの間を縫って、シダが生え



ACCESS

サンフランシスコからレッドウッド国立州立公園までは101号線で約500キロ。車で5時間ほど。ここにはビジターセンターがあるので、他の州立公園あるいはおすすめの森や巨木の場所を確認できる。



倒木は若木を育てる苗床となり、次世代へ生をつないでいく。



レッドウッドはスギ科に属する。現在、世界で最も高い木はレッドウッド国立州立公園にある「ハイペリオン」で樹高115.5メートル。35階建てのビルに相当する。

シヤクナゲやアザレアやユリ、アヤメが咲き乱れ、芳しい香りに満ちていた。西海岸の強烈な日差しは天に届きそうなたまごの背の高いレッドウッドの樹々によって、柔らかな木漏れ日に変わり、おとぎの国の森のように感じられた。レッドウッドという名前は樹皮が赤いことから名付けられた。では、なぜ、レッドウッドの樹々はこのように高くなるのか。それは30センチもの厚く硬い樹皮による。タンニンを含んだ樹皮は菌類や昆虫の侵入を防ぎ、耐火性もある。材としても優秀で、縮みにくく、木質部もまたタンニンを多く含み、シロアリの侵入を防いでいるのだ。平均樹齢は500〜700年、長寿の樹になると2000年を超える。樹

齢を重ねることによってのみ枯れ、枯れた樹木が強風によって倒れるのだという。

こうして強靱な体を持つレッドウッドは、恐竜時代から生き続けてきた。その時代の北半球にはレッドウッドの森が広がっていたと言われている。実際、1億6千万年前の化石がカナダやヨーロッパ、アジアの海外線から発見されている。おそらくそれは彼らの繁殖力の強さにもよるものだろう。

レッドウッドは種からだけでなく、根や倒木、切り株、幹にできた瘤からも発芽する。彼らは下枝を落としながら上へ上へと伸び、なおかつ落とされた枝は地上で大木に育っていくのである。針葉樹の中で種以外で繁殖するのは珍しい。このように長い年月をかけ、他の樹木とのサバイバルに勝ち残ってきたのが、世界一高い木に育つレッドウッドという木なのである。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』『地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』講談社などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主催し、国内、海外ツアーを行っている。

イギリス
エジンバラ

バルフォア伯爵邸の 枝垂れイチイ

ACCESS

エジンバラからA1号線で東へ約50キロ。車で40分ほどのイースト・リントンへ。そこから田園風景の中の道を南へ3キロほどのハディントンに位置する。バルフォア邸は個人宅のため、事前の許可が必要になる。



枝垂れイチイのトンネルの入口。外側からは緑の葉を茂らせた普通の樹に見える。

スコットランドの古都エジンバラから東へ車で40分ほどのイースト・リントンという小さな町。その外れにバルフォア伯爵の広大な領地があり、日英同盟締結に尽力したバルフォア首相（在任1902〜05）の子孫が代々守っている。門を入ってから木立の中を車で10分ほど抜けるとウィッティンガム城が姿を現す。その城の横に緑の小山のように見えたのがこの樹齢千年のイチイだった。

現領主のロ德里ック・バルフォア伯爵は邸内で紅茶をいれてくれると、城の塔に上ってイチイを上から見せてくれた。その先には樹が好きな伯爵が自ら植えたという世界各地の巨樹の森も見渡せた。

庭に出た伯爵は愛犬を伴って緑の小山の周囲を半周し、枝の隙間に開いた1メートルほどのトンネルの前に立つ。「ここからは一人で中に入って、樹との時間を堪能してください」と言うと、ほほえみながら去っていった。

身を屈めてはうように枝の間を進むと空気は一変する。やがて太い幹が見え、その周囲にイチイの枝が360度、地面までびっしりと枝垂れていた。地面に着いて根付くとそこからまた枝が芽生え、古い枝を支えている。幹の周囲は枝でできたドームのようだ。

外側は長さ2センチ、幅2、3ミリの細かな葉で隙間なく覆われているのだから、枝の数は何百本とあるだろう。そこに立った瞬間、私は感動で言

葉をなくしてしまった。不滅の存在を信じさせてくれる神のような樹。何か力強く優しいものに包まれたような感覚だった。その後、一緒に行った多くの人の誰もが同様に感動し、中にはこの枝垂れた枝の中に1時間以上も黙って座っている人もいた。新しく生まれ命が古い命を支える。無数の支え合いが私たちの心を動かすのではないだろうか。

イギリスにはイチイだけの分厚い写真集があるほどこの樹が多い。その大半は教会の庭にあり、樹齢千年以上中には五千年といわれるものもある。

その不滅性ゆえに、この常緑樹は、キリスト教以前のドルイド教の時代から「聖なるシンボル」とされてきた。今

も残るそれらの樹はどれも神秘性や威厳を湛^たえている。

イギリスのイチイは西洋イチイと呼ばれる種で、日本のイチイと同属だ。赤い実をつけ、円錐形の樹形になる。しかし、この写真のように枝垂れている種類は見たことがなかった。これまで40カ国以上で見た数千本の巨樹の中で、最も心に残る樹である。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』（講談社）などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。

樹齢1000年以上。樹高18メートルで枝張り4000平方メートル。学名のTaxusはギリシャ語のtaxon(弓)が語源。

ニュージーランド
北島

命をつくった といわれる 「タネ・マフタ」



ACCESS

ニュージーランド北島のオークランド国際空港から、ワイボウア森林保護区までは約247キロ、車で3時間半ほど。ステート・ハイウェイ1号と12号で北上するが、森の入り口50キロ手前のダーガビルを過ぎると看板があるのでわかりやすい。



カウリ博物館の壁面にはカウリの幹回りが再現されている。過去最大記録は26.83メートル。

ニュージーランド北島、ワイボウア森林保護区の遊歩道を歩いていると突然、目の前にその巨樹が現れた。オベリスクのように空に向かって立っていたのは「タネ・マフタ」と呼ばれる巨大なカウリの樹だ。カウリは特質として、若いときにつけた多くの枝を、年を重ねるごとに自ら落とす。幹の上部だけに枝を残した姿は神聖な記念碑のように見える。

ナンヨウスギ科に属するカウリはニュージーランド固有の樹の中で最も背が高くなる樹種だ。タネ・マフタは樹高51・5メートルに達する。そのうえ、湿気や害虫に強く、柔軟性に富んで軽い。木目も均一でまっすぐになる

ので、材木としても格別に優秀だ。だが、そのために災いを招いた。200年前までニュージーランドの北島にはこのカウリの原生林が広がっていた。現在は北島の森のわずか5パーセントにも満たない。

先住民であるマオリは神話に基づく掟を忠実に守り、カヌーをつくるなど必要最低限のカウリだけを伐つてきた。ところが1800年代に入ると優秀な材木を求め、カウリの積み出しにイギリスから軍艦が多数来航したのだ。1850年にチェインソーが導入されると伐採量はピークを迎える。急激な伐採によって100年後には生産量がピーク時の0・05パーセントま

で落ち込み、1951年にカウリの伐採は禁止となった。そして現在、カウリの樹はこのワイボウア森林保護区やコロマンデル半島などの一部にしか見られなくなっている。

ニュージーランドで最大の樹であるタネ・マフタの「タネ」とは、マオリ語で天の神ランギと大地の母パバの子どもで、森の生きものたちを守る神のこと。「マフタ」は森を意味する。つまり「森の神」だ。マオリの神話によれば、タネは、命をつくる神でもあり、最初に樹をつくり、鳥や、昆虫を含む森の生きもの全てをつくり、人間をつくったという。

この神話によれば最後につくられた

人間は、あくまでも森の一部と考えられている。近代文明にある人間中心主義とは真逆の考え方だ。もし、誰もがマオリの神話を尊重していたのであれば、カウリの樹は今も北島のあちこちで繁茂していただろう。タネ・マフタは人間による自然破壊の生き証人でもあるのだ。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』（講談社）などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主催し、国内、海外ツアーを行っている。

ニュージーランド最大の樹「タネ・マフタ（森の神）」は推定樹齢2000年以上。樹高51.5メートル、幹回りは13.8メートル。

コスタリカ
コルコバード

秘境の奥地に佇む マメ科の巨樹サングリロ



ACCESS

コルコバード国立公園へは、首都サン・ホセから車とボートを乗り継ぐ。途中、中米最大規模のマングローブ林を通る。小型飛行機で行く場合には往路はマングローブ林を通過するバルマル・スール空港（約3時間）、復路は移動時間の短いドレイクベイ空港（約1.5時間）がお勧め。



色鮮やかな羽を持つケツァール。「幻の鳥」とも言われている。

中央アメリカに位置するコスタリカは、カリブ海と太平洋に挟まれた、九州と四国を合わせたほどの面積の国。常備軍を持たない平和主義国家で、環境立国としても知られ、電力の100%近くを自然エネルギーで賄っている。地球上の全動植物の種の約5%が生息するという、エコツーリズムの先進国でもある。広大な森には「火の鳥」のモデルといわれる世界一美しい鳥、ケツァールもいる。私は長年この「中米の宝石」とも呼ばれる国へ行きたいと強く思っていた。

15年以上続く「世界の巨樹を見に行く会」ではいつもお目当ての巨樹の存在をはっきり確かめてからツアーを組む。だが、コスタリカに限っては、いつもとは逆の手順を踏んだ。調べてみると、幹周り24・5メートルのカボックがあることが分かった。自然豊かな国だけに探せばもっと価値のある巨樹を見つかることができそうだ。とくに気になったのが、太平洋に突き出た半島コルコバードだった。

ここを訪ねるには、内海にある広大なマングローブ林の中を小さなボートで3時間かけて行くか、小型飛行機に2時間乗っていくしかない。手付かずの熱帯雨林には野生のジャガーやバク、ナマケモノなどが生息している。コスタリカ人も憧れる秘境だ。私はあるホテルのウェブサイトで、

ジャングルに聳える巨大な樹の写真を見つけた。まだどこにあるのかも分らなかったが、この写真で、コルコバード行きを決めた。くだんのホテルから熱帯雨林を歩くこと3時間。そこに待っていたのは巨大な板根を持つマメ科の樹木、サングリロの巨樹だった。ツアーの参加者全員が息をのむ。板根は表土が浅く、地中の奥深くまで根を張れない土地で、樹を支えるため地表に現れる根の一部だ。落ち葉などの分解が速い熱帯雨林でよく見られ、日本では西表島などに多い。サングリロの板根の高さは人の背丈の倍以上あった。樹の頭頂部は見えず、

樹高を推測することはできなかったが、幹回りがほぼ同じである屋久島の縄文杉を凌ぐことは明らかだった。世界一植物の種類が多いといわれるコスタリカの分厚い植物図鑑にも載っていない樹。美しいモルフオ蝶が舞う深く静かな森の中で、私はこの樹に導かれてきたことに感謝した。

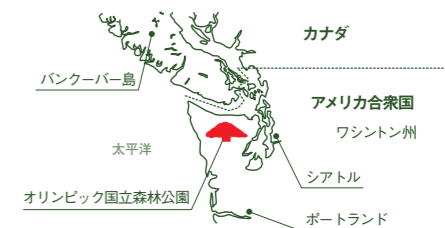
写真・吉田繁 文・蟹江節子
写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く「地球遺産」最後の巨樹』(日本遺産 神宿る巨樹) (講談社)などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。

この巨樹の存在を唯一知るローカルガイドと幹周り18メートルの *Dussia tessmannii*。英名 Sangrillo、現地名 Frijolon。

アメリカ
ワシントン州

苔に覆われた ホー・レインフォレスト

ACCESS



シアトルからホー・レインフォレストへは車とフェリーで約4時間。シアトルの北26kmにあるエドモンズからフェリーで35分のキングストンへ。101号線経由で約237km。



公園内では大型の鹿「エルク」が保護されている。

ここはホー・レインフォレスト。アメリカの北西端、カナダとの国境に近いワシントン州・シアトルの西側に位置するオリンピック国立森林公園内にある。1981年に世界遺産に登録さ

れた公園は、太平洋沿いの半島にあり、海から季節風によって運ばれた雨雲が、中心部に聳えるオリンピック山脈に大量の降雪をもたらし、山脈の西側をアメリカ本土で最も湿度の高い場所

にしている。降水量は年平均3600ミリに達するという。そうした気候によってつくられたのがこの温帯雨林地帯、ホー・レインフォレストだ。この森を訪れた人の心を最も惹きつ

けるのは、樹という樹が、幹から枝先までびっしりと苔に覆われている風景だろう。
たつぷりと水分を含んだ苔に触れてみると、5センチ以上も沈み込む厚さがある。横に伸びた枝から垂れ下がる苔は長いもので1メートル近い。色も緑だけでなく、黄緑、黄、オレンジと様々だ。その苔を風に揺らす姿は、美しく彩られた着物を纏った森の巨人のようにも感じられる。そして樹々から滴る水滴や湿気で潤んだ森は歩く者の周囲を優しく包み込む。

それだけではない、温帯雨林地帯であるこの森には、トウヒやモミ、スギなど高さ100メートルを超す針葉樹の巨樹が林立する。なかには幹周り20メートルを超えるものもあり、苔に覆

われた巨木が遊歩道沿いに並ぶという圧巻の風景を目にすることもできる。
屋久島の雨林やカナダのクイーンシャーロット、コスタリカの苔の森にも魅了されたが、そのどこよりも圧倒的な迫力がある。これほどの厚みや長さのある苔は見たことがない。

ちなみにこの苔は「クラブ(棒)・モス(苔)」という名前だが、実はヒカゲノカズラなどの仲間だ。古生代に栄えたシダ類の生き残りともいわれ、生命力が強い。だからこそ、こんなにも成長するのもかもしれない。
ホテルを出発するとき、フロント係に「今日は雨になりそうだから森に行くには最高ですよ」と言われたが、その通り、ときおり降る小雨に濡れた苔は息を吹き返したように揺れ、ますます神秘的な光景になった。雨のホー・レインフォレストでは森全体が一つの生命体であるかのような不思議な感覚にとらわれる。森に憧れる者なら一度は訪れたい場所だ。

写真・吉田 繁 文・蟹江節子

写真家の吉田 繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で「巨樹を見に行く」「地球遺産 最後の巨樹」「日本遺産 神宿る巨樹」(講談社)などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主催し、国内、海外ツアーを行っている。

ほとんど針葉樹だけのレインフォレストは世界でも珍しい。



台湾
大雪山森林遊楽区

台湾最大の巨樹 大安溪神木

ACCESS

台中市から「大雪山森林遊楽区」までは車で1時間半。そこから220林道を35kmほど。林道は車で行ける場合もあるが、分りにくい場所にあるため山岳ガイドの同行をお勧めする。



大雪山には倒木更新の姿も見られ、森の勢いが感じられた。

台湾は日本から近いこともあり、スギやマツ、クスノキなど植生がよく似ている。しかし、その九州より狭い国土には、日本をはるかに超える樹種が存在すると言われている。

台湾は銘木の地として知られ、とくにヒノキは、日本の法隆寺や、東大寺大仏殿、平安神宮、薬師寺金堂などに神社仏閣に多用されてきたという。良材の産地として最も有名だった阿里山は、日本が、日清戦争後から第二次大戦までの領有時代に、木材の搬出のために阿里山鉄道が敷設されていた。

さ、香りの良さで好まれ、紅檜は台檜に似た材質ながら少し赤みを帯びている。

材として格上なのは台檜だが、紅檜はより多くの樹脂を含み、生命力、繁殖力に優れている。このため日本の神社建築材として重用されたのだ。

いま、台湾に残る巨樹20本のうち19本が紅檜なのはその生命力のなせる業なのだろう。写真の大安溪神木は日本最大の巨樹である蒲生の大クス（幹周り24.2m）をしるぐ幹周りがあり、推定樹齢2500年から考えても信じられないほど多くの葉を青々と茂らせていた。樹形が丸太ではなく、凹凸の激しい主幹から、何本もの幹を広げて隆々

としたたくましい姿が、伐採を免れて神木として残された理由だろう。

台湾には、巨木信仰があり、高地には何本もの神木が保護され、日本の神社仏閣に当たる、道教の寺院「廟」には「神木」として多くの巨樹が祀られている。国内には「森林遊楽区」という保護区がいくつもあり、休日には多くの人々が訪れ賑わう。森の中で家族連れが手づくりのお弁当を広げて楽しんでいる姿は、古くからこの国の人々が、樹に尊敬の念を抱き、親しんでいることが察せられる。

巨樹20本の中には比較的行きやすい場所にあるものも多いが、大雪山森林遊楽区にある大安溪神木は、大雪山の

中腹、標高2325メートルあたりの深い森の中に立っている。ここまで行くには林道を10時間も歩かなければならない。容易にたどり着くことのできない森の奥で出会ったその姿には、台湾で「樹王」と称されるのにふさわしい風格があった。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で「巨樹を見に行く」「地球遺産」「最後の巨樹」「日本遺産 神宿る巨樹」(講談社)などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。

推定樹齢2500年。幹周り27.3m。樹高55mと堂々とした台湾神木第1位。



アスファルトも突き抜けるという強靱な気根が幾重にも垂れている（樹高約20メートル）

世界の巨樹を巡る

16

沖縄県
那覇市

崇元寺石門の ガジュマル

ガジュマルは亜熱帯から熱帯地方に分布するクワ科イチジク属の常緑高木で、日本では屋久島以南で自生している。成長するにつれ多くの気根（地表に出ている茎や幹から出て、空気に現れている根）が、多数に枝分かれした幹と絡まって、独特の不思議な樹形

になるため、その存在感に圧倒される。日本で最も多くのガジュマルが見られるのは沖縄だろう。校庭や目抜き通りなどさまざまな場所によく目にする。公園で地元のお年寄りたちがガジュマルの木の下で涼をとりながらゲートボールを楽しむ光景は、なんと

ものどかだ。沖縄に多くのガジュマルが自生しているのは気候が適していることもあるが、古くから、この樹には「キジムナー」という赤毛で小柄な少年のような精霊が住んでいるという言い伝えがあり、ガジュマルは幸せを呼び寄せる「多幸

ACCESS

那覇空港から北東へ車で15分。国道58号を經由して泊交差点を右折し、県道29号に入る。バス停「崇元寺」の目の前、ゆいレール「美栄橋」駅から徒歩約10分



石門から3キロほど離れた浦添市勢理客では、獅子舞が古くから地元の守り神として守り伝えられる。

の木」として大切にされてきた。巨大なガジュマルが立つ場所は観光地にもなっていて、なかでも沖縄本島の最北端に位置する大石林山のガジュマルの森や、名護市の樹齢300年のひんぱんガジュマル、南城市のガンガラーの谷にある高さ20メートルものウフシユガジュマルなどには多くの人が訪れる。私もこれらのガジュマルを見に行ったことがあり、その迫力や神秘的な雰囲気には感動させられたが、那覇市にある「崇元寺石門のガジュマル」は、それまでに見たガジュマルの巨樹にはない異様な空気を漂わせていた。

1527（大永7）年に創建された臨濟宗の寺だが、建物は太平洋戦争で焼失・全壊したという。現在は琉球石灰岩でできた重厚感のある三連アーチの石門だけが残る。大通りに面した石門の前にはコンビニや商店が立ち並び、那覇の中心街らしい明るく陽気な雰囲気が満ちている。けれど、この石門をくぐった途端に何もかもが止まったかのように喧噪が消え静まり返る。

建物を失った広場にはガジュマルの樹だけが立ち、周囲の重々しい空気を支配しているのが感じられる。わずかに残る石垣にはびっしりと根が張り付き、長い年月にわたってこの場所を守ってきたことが察せられる。

詳しい樹齢は不明だ。あの激しかった沖縄戦の戦火をくぐり抜けてきたかもしれないと想像する人もいるだろう。戦後の焼け野原に力強く芽生えた樹だろうかと思いを巡らせる人もいるだろう。どちらにしろ、大切な何かを伝えるためにこのガジュマルは立ち続けている気がした。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

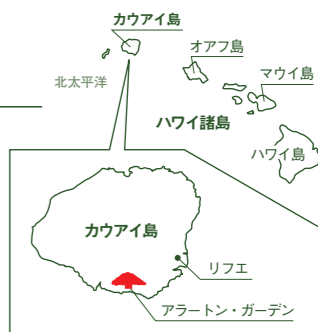
写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』『地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』（講談社）などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。

アメリカ
ハワイ州カウアイ島

アラートン・ガーデンの オーストラリアゴムノキ

ACCESS

ホノルル空港からリフエ空港までは30分のフライト。空港からアフキニ・ロード、ハイウェイ50号、520号線を経由してラワイ・ロードに入る。車で約30分。



庭園から望むラワイ湾の美しい眺め

「ここは映画『ジュラシック・パーク』の中でティラノサウルスの卵が発見された場所です。見覚えがありませんか？」

庭園を巡った最後に、ガイドが案内してくれたのが写真のオーストラリアゴムノキだ。人の背丈を越えるほど成長した板根が、地面をうねるように這っている。いかにも恐竜時代の風景を彷彿とさせ、スビルバーグ監督が口

ケ地としてこの地を選んだのも納得できる。このオーストラリアゴムノキのある「アラートン・ガーデン」は、ハワイ諸島最古の島、カウアイ島の南端、ラワ

イ湾を見下ろす高台にある。約40万平方メートル(東京ドーム8・5個分)の敷地には、邸宅や池、東屋などが配置され、緑の中に美しい景観を作っている。庭園とはいえ希少な植物も多く、絶滅危惧種の保護にも力を入れている。

この樹はオーストラリアゴムノキの巨樹が林立するエリアの中の1本。一段と大きく、その偉容が見る者の目を釘付けにする。2メートル以上の高さから幾重にも広がる板根が、地面に着くとのたうち回るように伸びる独特の樹形が魅力だが、不気味な生き物が、長い触手を伸ばし、じわじわとこちらに迫ってくるようにも見える。

板根は主にその樹を支えたり、水分や養分を吸収したりするために発達する。原産国のオーストラリアでも大きな板根を持つ巨樹を何本も見た。けれど、これほどインパクトのある板根は見たことがない。いったい何百年生き続ければこんな姿になるのか――。

アラートン・ガーデンには、元々カメハメハ4世の王妃エマ女王の別荘があった。その後、マクブライド・ファミリーがタロイモや米を栽培し、1938年に建築と造園業を学んだロバート・アラートンが購入し、本格的な庭園づくりが始まった。オーストラリアゴムノキもアラートンが植えたものだ。とすると、樹齢はまだ70年ほどだと考えられる。

それでも周囲に強い気を放つ巨大な板根の前に立つと、太古の世界に引きずり込まれるような気分になってしまふ。「訪れた誰もがひと目でこの樹に魅了されます」とガイドが微笑みながら教えてくれた。

写真・吉田 繁 文・蟹江節子

写真家の吉田 繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』『地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』(講談社)などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主催し、国内、海外ツアーを行っている。



幹周り15メートル、樹高40メートル。クワ科イチジク属で英名は「モアトン・ベイ・フィグ」。

愛媛県
四国中央市

複雑怪奇な ねじれを抱える 藤原のイブキ

ACCESS

JR予讃線「伊予三島駅」から南へ18.5キロ。車で約30分。319号線から高知伊予三島線に入り、富郷ダムの1キロ手前で左折。藤原大橋を渡り県道脇の案内板に従い左方向へ進む。



樹形の特徴をよく表している下関市の恩徳寺の結びイブキ

イブキはヒノキ科ビャクシン属の常緑針葉樹で柏檜、伊吹柏檜とも呼ばれ、日本や中国だけでなく欧米、北アフリカなど北半球全体に分布している。

その特徴は大木になると幹が複雑怪奇にねじれることにある。なかには誰かにひねられたように頭頂部から根元まで幹全体が同方向にうねっている巨樹もある。通常、樹の幹がねじれるのは日照や風などの影響といわれるが、イブキの巨樹はみな、どのような環境にあってもどこかにねじれを抱えている。何か遺伝子レベルで特徴づけられているのではないだろうか。

もうひとつ、この樹種ならではの特徴が、樹皮が縦に割れて剥がれやすいことだ。剥がれて露出した木質部が長

年の風雨にさらされて白く白骨のようになっているものもある。

これらの特徴をすべて備え、一目瞭然なのが、山口県下関市にある恩徳寺の結びイブキだ。また、イブキ独特の性質を生かし、究極まで表現した盆栽は「真柏」といい、なかには何千万円もする高価なものもあるという。

だが、藤原のイブキ（左写真）を訪ねていったときの第一印象は、それまで見たイブキとはまったく違った。

青々とした新緑の茶畑が広がり、訪ねる人も少ないであろう静かな山里に、小さな観音堂がある。高い石垣が組まれた境内から、そのイブキは枝を石垣の下まで垂らし、若々しい緑をあふれさせていた。樹全体に葉が繁りこ

んもりとしていて、とても樹齢千年を超えた古木とは思えない。

しかし、石段を上り、幹がよく見える樹の正面ともいべき場所に立った途端、「やはり、イブキだ」と納得させられた。太い枝は地をほうのように伸び、幹とともに苔むしている。ねじれてゴツゴツとしたコブのような部分や木質部をあらわにした部分など、その樹全体が、古色然とした威容を放ち、何かを悟らされるように迫ってくる。境内の外から見た穏やかな表情とはあきらかに対照的だった。

イブキはお寺に植えられていることが多く、とくに禅宗のお寺の境内に多い。それはイブキの成長が遅く、「自分」と向き合って、長い時間をかけて大き

くなっていく」という意味で、禅を象徴するからともいわれている。

禅の深い教えまでは知らなくても、この樹を360度じっくりと観察すると、常に多くの葉をつけて若々しく生きる姿は裏に苦悶を表す幹があるように、人間が成長するにも、並々ならぬ葛藤と努力があると教えられているように感じられる。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』講談社などを刊行。「世界の巨樹を見に行く」を主とし、国内、海外ツアーを行っている。

幹周り9.3メートル、樹高12メートル。この反対側は樹齢1300年とは思えぬほど多くの葉が青々と繁っている。



ドイツ
グロース シェーネベック

炎のような樹形を持つ ジルカブナ

ドイツには、これまで巨樹を見るツアーで何度か行っている。ドイツでは分厚い写真集が出版されるほど多くの巨樹があり、私たちもかなりの数を見たが、中でも、最も忘れがたいのがこの「ジルカブナ」だった。

車で北東部ブランデンブルク州にあるグロース シェーネベックの村に入ると次第に緑が多くなり、現地に到着すると辺りはすっかり森に囲まれた。

一行が、ちらほらとブナの木が混ざりますがすがすがしい空気の森の中を30分ほど歩くと、「ジルカブナ」と書かれた看板が見えてきた。その先には広場のような空間があり、まだ目当てのブナは見えないが、すでに何か強い気配のようなものを感じられた。

そして、その広場の奥に立つ「ジル

カブナ」を視界に捉えた途端、皆一様に、その炎のような樹形に目を見張った。強い気を放ちながら、まさに燃えているように見える。それまでも多くの巨樹に出合ってきたが、このような気を感じるのは初めてだった。

樹の周りを歩き、見上げると、地上2メートルの辺りから伸びる枝たちが弓なりになっているのがわかった。主幹から六つほどに分かれた幹も弓なりになっている。炎のように見えるのは枝や幹がいったん、外側へと伸び、カーブしながら上へと伸びているためだ。

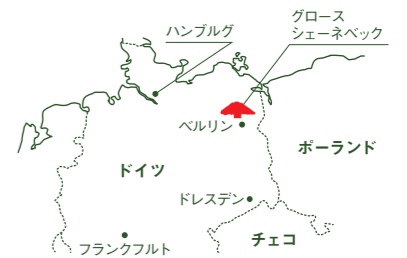
ツアーの仲間が写真を撮ったり絵を描いたりし始めると看板の方から、テーブルや椅子を抱えビクニックボックスを持って、人がやって来るのが見えた。彼らは静かにテーブルや椅子を

置き、テーブルクロスの上にお茶やケーキを並べ始めた。

実はこのブナには言い伝えが残されている。「ジルカ」というのはその昔森の管理人をしていた夫婦の奥さんの名前。その奥さんの30歳の誕生日を忘れていた夫が、何もお祝いの準備をしていないことに気づき嘆いていると、妖精のような小さな男の子が現れて、夫婦をこの樹の下まで連れ出した。そこにはお祝いのためのケーキやコーヒータくさんの花が飾られていた。以来、彼らは感謝の気持ちを込めてこのブナを守り続けたという言い伝えだ。

お茶の用意をしてくれたのは地元の人々で、彼らは私たちに言い伝えと同じ体験してもらおうと準備してくれたのだ。このようなもてなしで迎えて

ACCESS



ベルリン市街から北へ約60キロ。B2号線、A11号を經由してL220号線へ。そこから12キロ進んだ先の駐車場から徒歩で約3キロ。Schorfheideの東端。



ツアー参加者が描いたスケッチも燃えているような勢いがあった。

くれることから、今もこの樹がとても大切にされていることがわかる。

どのようにして形成されたのかはわからなかったが、この炎のような樹形は、人々の心に長い間ともし続ける静かだが強い、樹に対する思いを映し出し、私たちにその心を、生き生きとした存在として、見せてくれたのかも知れない。

写真・吉田繁 文・蟹江節子

写真家の吉田繁とフリーライターの蟹江節子は、1990年頃から世界の巨樹を訪ね歩き、ライフワークとなっている。共著で『巨樹を見に行く』地球遺産 最後の巨樹』『日本遺産 神宿る巨樹』講談社などを刊行。「世界の巨樹を見に行く会」を主宰し、国内、海外ツアーを行っている。

森の奥の日の当たる場所で存在感を放つ「ジルカブナ」。樹齢280年、幹周り6.8メートル、樹高23メートル。学名Fagus sylvatica

